

- 29) この件についても、詳細は八巻前掲書第4章を参照されたい。
 30) *De ven. sap.*, n.1, 18-23.
 31) *De apice theor.*, n.16, 1-4; *De principio*, n.1, 1f.
 32) *De mente*, I, n.54, 3f.

意見

水田 英実

主として川添さんの提題に対する意見を述べさせていただきたい。

中世哲学に対するキリスト教の関わりについて、それを過大に扱うことは避けなければならないということ、当然それを過小に扱うこともまた避けなければならないということでもあろう。ところでもし中世哲学が存在するとすれば、それはキリスト教の側に理由があって哲学と関わるのが不可避であるとされたところに由来するという説明ができるのではないか。(むろんこのほかにも多様なあり方がありうることを否定するつもりはない。しかし、ことさらに中世哲学の現代的意義を確かめようとする姿勢をとる理由も、まさにここにあるのではないかと思う。) そうだとしたら、少なくとも、この点を過小に評価することにつながるような見方(たとえば「特権的真理」という表現のような)をとることは、避けるべき重大なことからであると言わなければならない。そう思うので、発言させていただいた。

意見

岩田 靖夫

私は川添信介氏の提題に興味をもった。氏によれば、現代では特権的真理は承認されておらず、また、そのような真理が存在するという主張自体がいかかわしい、と考えられている。ところが、中世ではキリスト教が絶対的真理として前提されている。だから、当時の思想をあれこれと歴史的に詮索するというような仕事ならばいざ知らず、それを現代において哲学的に意義あるものとして研究することは困難である、と